

スープカレーと大型犬

小倉 一純

図らずも二年浪人した僕は、小学生の頃から憧れだった、北海道大学にようやく進学をした。

当時、父親は、東京の日本電信電話公社（現NTT）に勤めていて、僕が札幌で最初に暮らしたのはその子弟寮だった。

ベッドと机が予め用意された四畳個室の窓いっぱいには新緑の藻岩山もいわやまが雄姿を見せていた。市内を流れる一級河川の豊平川の堤防下に引越すまでの一年半、僕はそこで暮らした。定員五十名の学生寮だった。

その近くに「ナマステ」という名前のカレー屋が出来た。インドカレー専門店である。サイドメニューにあるのは、コーヒーではなく、セイロンティーだった。

後年、聞くとところによると、この店は日本で初のスープカレー屋であるらしい。

カレーは、スープ皿に入れて供される。チキンの大きい塊もゴロリと入っていた。

一方、ご飯は、大き目の皿に、杓文字しやもじで少々

つぶしたかのように平らに盛ってある。分量は大目である。お替わりも自由だった。

スープカレーという位だから、普通のカレーとは違い、まったく粘度がない。つまり、サラサラなのである。味はピリリと辛い。額から大粒の汗が吹き出た。

スプーンで掬^{すく}ったご飯をスープカレーに浸して食べる、という方法を店の奥さんから教わった。これなら、少しのカレーでたくさんのご飯が食べられる、と僕は思った。

当時、喫茶店ではコーヒー付きのドリアが五百八十円位だったと思うが、このスープカレーは九百円以上の値段だった。最初は高いと思ったが、ご飯のお替りまで考えるとなかなかリーズナブルである。

その日もいつもの三人とカウンター席に並んでスープカレーを食していた。彼らは皆、北大の同級生である。

——と、店の奥から犬が出て来た。それも馬鹿でかいセントバーナードである。

「ご飯お替りお願いします！」

といった僕のすぐ横に犬はピッタリと引く付くようにして、じっと立って佇んでいる。人懐こい顔をしていた。僕は自分の額の汗がいつもより多いような気がした。

「こういう犬はさあ、スイスのアルプスで人命救助なんかもやっているんだ。みんな心配するなよ。噛みついたりしやしないよッ」

大して知りもしないのに、偉そうに太鼓判を押す僕に対して、カウンターのの中からマスターの奥さんが小声でいった。

「うちの犬は噛むわよッ（フフッ）」

藻岩山が紅葉になっても、僕らはナマステに通っていた。その日も僕が二回目のご飯のお替りを頼むと、いつもの犬が出て来て僕の横にピッタリと寄り添った。

結局、僕らは、ナマステで、三回目のご飯のお替わりを頼んだことは一度もなかった。